

◇ 1月の天文暦 ◇

日 時	記 事
1 19	月 最近
2 15	地球近日点
3 23	下弦
6 10	小寒 (太陽黄経 285°)
11 3	朔
17 6	月 最遠
18 11	水星 外合
19 5	上弦
20 14	木星 衝
21 3	大寒 (太陽黄経 300°)
26 16	望
29 0	月 最近

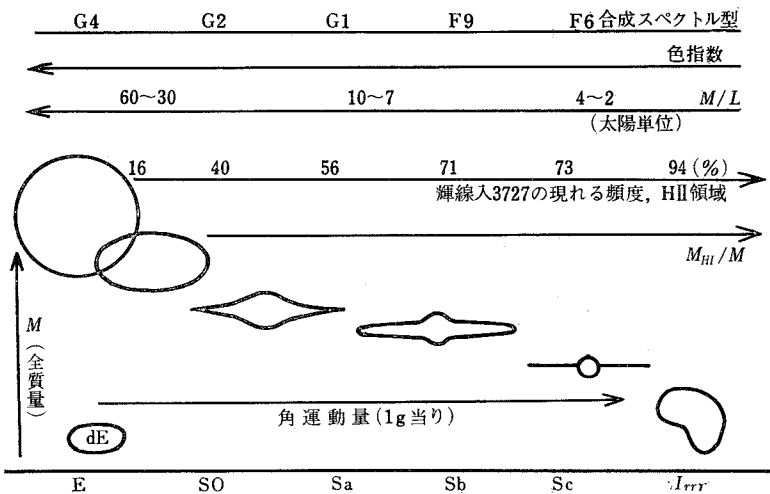
(天文暦担当は東京天文台原寿男氏, 今年の星雲めぐり執筆者は東北大の氏家慧一氏でした。)

星雲めぐり (12)

エピソード 現在星の進化については、観測と理論を結びつける筋道が一応できているが、星雲の進化についてはまだ深い明期の感が深い。図はハブル分類型にそって、進化の手がかりとなるいくつかの量を、数量の増加する向きを矢印であらわし、模式的に示したものである。

仮に分類型を星雲進化の序列と考えると、図の諸量から明らかなように、Irr→S→Eが進化の方向となる。しかし偏平な渦状から楕円に、はたして移りうるであろうか？星雲内の星は種々の進化経路をたどるのに、星雲はすべて単一の進化系列をとることが可能であろうか？更に質量や単位質量当りの角運動量は、各分類型に応じて異なる事実と、一つの星雲内では突発事件が起らない限り、大局的にこれらの量は保存されると予想されることは矛盾しないだろうか？疑問がいくつか伴う。

そこで分類型の暗示にとらわれず、進化の決め手を原始星雲形成での、質量・密度・乱流速度・磁場等に求める考え方が、今日では有力である。星雲は誕生以来本質的に現在ある型であるとも極言でき、渦状星雲を例にとれば、進化の途上で腕が盛衰したり、なかには衝突によって、ガスや星間物質を強奪された状態もありうるが、決して楕円形とはならない。星雲進化の整然とした答は、近い将来に期待できそうである。いささか駈足の星雲めぐり今回で幕としたい。(UJ)



東京における日出入および南中 (中央標準時)

1月	夜明	日出	方位	南中	高度	日入	日暮
日	時分	時分		時分		時分	時分
1	6 15	6 50	-28.1	11 44	31.3	16 38	17 14
11	6 16	6 51	-26.7	11 49	32.4	16 46	17 22
21	6 14	6 48	-24.3	11 52	34.3	16 56	17 31
31	6 9	6 43	-21.2	11 54	36.8	17 7	17 40

各地の日出入補正值 (東京の値に加える)

(左側は日出, 右側は日入に対する値)

鹿兒島 +27 +47	鳥 取 +22 +22	仙 台 +2 -11
福 岡 +33 +43	大 阪 +15 +20	青 森 +10 -17
広 島 +26 +33	名古屋 +10 +13	札 幌 +14 -26
高 知 +20 +30	新 潟 +9 +2	根 室 -2 -44

